2024年1月の総評に代えて　　高橋修宏

ヘルメット古代貝めくビル街冬　　（長谷川柊香　宮城県）

もしや「古代貝」とは、古世代からの生き残りと言われるカブトガニのようなものなのだろうか。ここでは「ヘルメット」を「古代貝」と見立てる、言わば換喩的な手法によって、現代の「ビル街」が異化されてゆく。荒涼とした「冬」の季節感もふさわしい。

かさぶたをめくる　　（まちりこ　埼玉県）
母さんが出ていく

「かさぶたをめくる」という身体的な痛覚を通して、トラウマと呼ばれる何かを暗示するような作品。ここで「かさぶた」は母によってもたらされた傷跡と想像できるが、「母さんが出ていく」ことで作中主体を解放されたのだろうか。

天国で描かされているりんごの絵　　（松下誠一　東京都）

まさに「りんご」は、アダムとイブの楽園追放に関わる象徴的な果実。明らかに、そのことを踏まえ読むべきだろう。「天国」には「りんご」が無いのだろうか。どこか自虐的なユーモアも漂う一句。

一月の羊一頭ずつ食べる　　（中矢温　愛媛県）

「一」という共通する表記を活用した作品。ただ文字表記の面白さだけでなく、「羊一頭ずつ食べる」という象徴的とも呼べる儀礼行為をほのめかすことにより、ある実在感をもたらしているようだ。

鯨骨の中で始発を待っている　　（永山逢海　神奈川県）

かつて巨大な鯨の骨格標本を見たことがあるが、どこか古代の舟のような気配があった。その「鯨骨」の中で「始発」を待つイメージは、胎内とも共通する親密で不思議な空気感を漂わせている。いったい、作中主体は何処へ向かうのだろう。

芒野にセーラー服の浮いている　　（玻璃　愛媛県）

この「セーラー服」を着ていた者は、何処に消えたのだろう。「セーラー服」という女学生を明示する事物だけが、ただ「芒野」に浮いているのだろうか。どこか、和製ホラー映画のような気配さえ感じた。

陰茎を割れば紳士が住んでいて　　（大嶋碧月　兵庫県）
コーヒー豆を挽いてたりする

「陰茎」という男性の象徴をモチーフとしながら、見事にナンセンスな世界の方へと転じている。とりわけ、二行目の「コーヒー豆を挽いてたり」のユーモラスな表現には驚かされた。男性の〈性〉をめぐる、痛烈な批評性さえ感じさせる。

真ん中のドを弾くだけの小春日和　　（日下部友奏　群馬県）

作者は、ピアノの前にいるのだろうか。「真ん中のド」だけ弾くという、ささやかな振るまいが「小春日和」と響きあう。孤独でありながらも、どこか思索的なイメージを受け取った。

いつか出逢う人とすれ違うように　　（髙松瞳　東京都）
降りない駅のホームを見送る

「いつか出逢う人」は、どこにいるのだろうか。そんな未知の人は、作者の「降りない

駅」で降りてしまったのか。もしや私たちは、日々「すれ違うように」暮らしているのかもしれない。日常的でありながら屈折率の高い表現にリアリテイが宿る。

アラジンの／ストーブの丸窓の外　　（櫻川佳子　愛媛県）
揺らめいている青の惑星

「アラジンの／ストーブ」の炎は、青いのが特徴。その「丸窓」を見ながら、作者は「青の惑星」である地球にまで想いをめぐらせているのか。ストーブの窓という小さな事物から、広大な世界へと飛躍するイマジネーションが巧み。

日の当たる／ベンチにならぶおばあちゃん　（平春来里　岐阜県）
三人の生を　編んで解いて

西東三鬼の有名句〈緑蔭に三人の老婆わらへりき〉の本歌取りのような作品。三鬼の句では、シェークスピアの《マクベス》に登場する魔女のような不穏なイメージがあるが、この作の三人の「おばあちゃん」がいるのは緑陰ではなく「日の当たる／ベンチ」。その明るさと相俟って、のどかな生命感が書きとめられている。

海に行く／ふりして塗った日焼け止め　　（常田瑛子　山口県）
バスの窓から見える交番

どこかミステリーのワンシーンのような作品。この作中主体が何をしようとしているのか明かされないまま、結語の「交番」が不穏な気配を漂わせている。

雨のパリ、／あなたがいるかもしれないし　（ひろみ　京都府）
もうどこにもいないかもしれない

都市の名とは、積み重なった歴史や風俗によって、あるイメージを雄弁に喚起するものだ。スコット・フィッツジェラルドに《雨の朝、パリに死す》という代表作があるが、やはり〈パリに死す〉が効いている。「もうどこにもいない」とは、すでに亡くなっていることをほのめかすが、あるリアリティを孕むのは「雨のパリ」のためかもしれない。

息ひとつ／意味を帯びない石を積む　　（鈴木たなか　京都府）
バベルの塔の土工に降る雪

そう言えば絵画（ブリューゲルなど）で見る「バベルの塔」は、石造りだ。ここでは、「意味を帯びない石」の一語が効いている。

失敗したフェルト人形ふわふわと　　（狛犬吠　岡山県）
みんな生まれたことを喜ぶ

「フェルト」と「ふわふわ」と頭韻を踏みながら、「生まれたこと」の喜びにそそがれる作者の眼差し。冒頭に「失敗」と記されていても、「喜び」へと至る緩やかな流れによって読者は救われる。